

## 広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

スーパーバイザー  
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。伝説の深夜番組「カノッサの屈辱」でその名を世間に広め、「進め!電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親である。



1月17日、プレゼンテーションにて

本プロジェクトは2016年、放送作家として「料理の鉄人」などの多くのヒット番組を手がけ、またくまモンの生みの親である小山薰堂氏をプロジェクトのスーパーバイザーに迎え、隈研吾氏（建築家）東京大学教授、生駒芳子氏（ファッショニスト・ジャーナリスト）、下川一哉氏（意匠研究所）らをサポートメンバーに発足。

昨年度は、52名の匠によるプロダクトが誕生。若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への採用や、ロックフェラー家主催のチャリティーアイベントへ出品されるなど注目を集め、匠自身もTVやwebメディアへの掲載など目覚ましい活躍を見せている。

2年目となった今年は、全国47都道府県から計51名の若き匠が選出。昨夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを見切つて、

1月17日に都内で行われた商談会では、百貨店・セレクトショップ・バイヤー・メディア・デザイン関係者などに向けて半年間をかけて製作した自身のプロダクトをアレゼンテーション。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。また、商談会の終盤ではビームスジャパンとのコラボレーション企画「LIFE with NEW TAKUMI ~新しい匠~新しい暮らし~」が発表されるなど、プロジェクトも進化している。

大学卒業後、京都での修業を経て本格的に従事。染色や織りを通し、米沢織の可能性をさまざまな形で世に問うてきた。一度裏返し、祖父母の代で復活させた「紅花染」は、染料となるベニバナの栽培から手掛け、納得のいく色を追い求め続けている。和服のほか、米沢織を用いたさまざまな小物類なども制作。精力的な活動を展開する一方、和服が日常的な装いとは縁遠くなっている現実も痛感していた。和服に対する憧れ、特別な存在感を、空間演出に生かしてみたい。「着る美」から、「見る美」へ。新田さんにとって、インテリアの分野は初めての挑戦だ。

「タペストリー」という当初のアイデアは、キックオフ・セッションでの生駒氏からのアドバイスを受けて「ついたて」に変更。地元の家具会社と一緒に想定したのはタペストリー。紅花染の生地をパッチワーク状に縫い合わせ、独特の

「伝統を守りながら『新しい』感覚やテクノロジーを吹き込む。『地域』の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」を地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。山形県選出の匠、染織家の新田源太郎さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

最初に想定したのはタペストリー。紅花染の生地をパッチワーク状に縫い合わせ、独特の

「伝統を守りながら『新しい』感覚やテクノロジーを吹き込む。『地域』の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」を地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。山形県選出の匠、染織家の新田源太郎さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。